

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	福岡県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	行橋市立 仲津中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	3	3	0	8	18
生徒数	78	101	111	0	290	

研究の概要

1. 研究主題

確実な学力を身につけ主体的に学習に取り組む生徒の育成
 = 指導方法の工夫改善、教材の有効活用を通して =

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

1・2年国語
 コミュニケーション活動の充実を図るため、「読み聞かせ指導」をおこなう
 全学年数学
 生徒の学力格差が出やすく、各単元の積み上げが必要な教科であるため。
 1・2年理科
 指導方法工夫改善をおこなうよう指定された教科であるから。
 全学年英語
 生徒の学力格差が出やすく、各単元の積み上げが必要な教科であるため。
 1年技術
 情報教育に関する基本的なスキルを身につけさせ、他教科でのパソコン活用を推進するため

(2) 年次ごとの計画

テーマ
 3年間の実践研究推進のために職員体制を整えるとともに、生徒も含めた学校全体の雰囲気づくりをする。また研究1年目としてスタート時点での生徒の生活・学習実態について調査把握し、今後の研究の方向性を検討する。
 仮説
 朝20分の読書活動は、読書習慣の広がりだけでなく、子どもたちの学習態度や能力、日常生活行動、内面的な成長、集団内の人間関係などに大きな変化を与える。
 研究内容・方法
 平成13年度から手がけた全体的な学校改革を4月から具体化・実践し、それを通して職員の組織体制や意識の変革を図った。
 生徒の学習・生活実態調査を9月と2月の2回、保護者の意識調査を2月に実施した。朝の活動を毎朝20分設け、これを読書活動と英会話活動の時間として、1年間継続し生徒の変容を追跡した。
 数学科では少人数習熟度別やTTで生徒の理解度に応じた指導を継続し研究授業も実施した。他の教科でもそれぞれに授業の工夫改善点を明らかにし分かりやすい授業づくりに努めた。
 週末課題・確認テスト・再テスト・補充指導という学習習慣の定着と授業についていけない生徒の指導を年間を通しておこなった。
 生徒の学力実態を把握するため、種々の学力調査テストに参加した。評価や教材の作製については教材会社との協力体制を結んだ。

テーマ
 指導方法の工夫やワークシートなどの教材の有効活用を通して、基礎・基本的な内容を確実に身につけ、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。さらにその基礎的な学習を基に学ぶ意欲を持ち、「思考力」「判断力」「表現力」を身につけ「よりよく問題を解決する」生徒の育成を目指す。また朝読書、英語コミュニケーション活動を継続発展させ、その影響・効果を調査する。
 研究の見通し(仮説)
 工夫改善を取り入れた授業を展開すれば生徒一人ひとりが毎時間の学習目標や内容を

成
15
年
度

理解し、生き生きと活動し、学びの喜びや充実感を味わうことのできる「わかる授業」を創造することができるであろう。

研究の内容・方法
全教科において、有効な教材の開発・改良をおこない授業の導入部分で生徒の学習に対する興味、関心を高め、本時のめあてをきちんとつかませる。展開部分においては思考の深まりがおこなえるような、教材、ワークシートを準備する。終末では授業に対する評価を生徒がおこない理解の度合いを自己評価できるようにする。

数学・理科・英語で習熟別指導やチームティーチングの授業を展開し、理解度に応じた指導方法の工夫改善をおこなう。

読書活動・図書館活動を発展深化させ、読書の量と内容の変化、読書量と学習成績との関係を調査する。

学習に関するアンケート調査を定期的実施し、生徒の学習に関する意識の動向を把握し、学習指導に生かす。

平
成
16
年
度

テーマ
全教科において授業の改善に積極的に取り組み、職員の授業指導力の向上を図るために研究授業をおこなう。自己評価や相互評価を通して、生徒のつまづきや学習方法の見直しをおこない、生徒自ら学ぶ姿勢を持つようその指導方法を研究する。また各単元の基礎・基本の内容を明確にし、評価についての研究を進める。

研究の見直し
工夫改善を取り入れた授業を展開すれば生徒一人ひとりが毎時間の学習目標や内容を理解し、生き生きと活動し、学びの喜びや充実感を味わうことのできる「わかる授業」を創造することができるであろう。

研究の内容・方法
全教科において、有効な教材の開発・改良をおこない授業の導入部分で生徒の学習に対する興味、関心を高め、本時のめあてをきちんとつかませる。展開部分においては思考の深まりがおこなえるような、教材、ワークシートを準備する。終末では授業に対する評価を生徒がおこない理解の度合いを自己評価できるようにする。

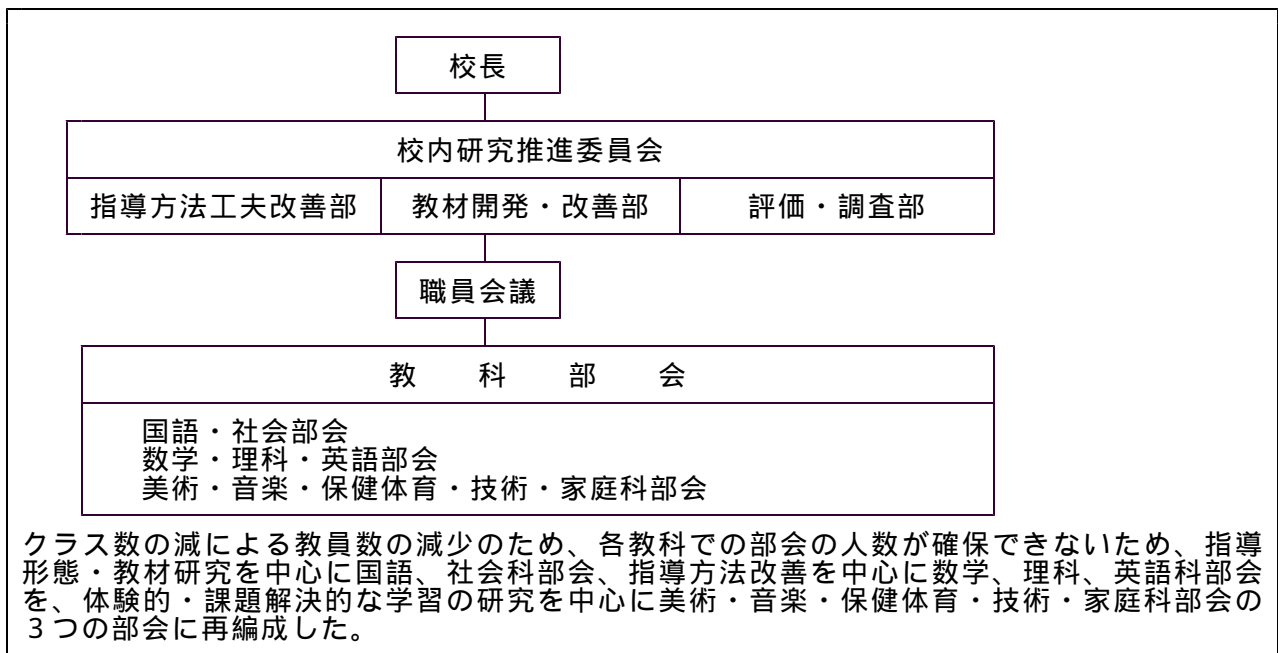
数学・理科・英語で習熟別指導やチームティーチングの授業を展開し、理解度に応じた指導方法の工夫改善をおこなう。

全教科で学力向上プランを作成し、その実践に努める。

読書活動・図書館活動を15年度同様におこない、現状の維持発展に努める。図書委員会と提携し、図書館運営をおこなう。

学習に関するアンケート調査を定期的実施し、生徒の学習に関する意識の動向を把握し、学習指導に生かすとともに、保護者の家庭学習への啓発活動をおこなう。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

校内研究授業を中心に全教科で研究授業が実施でき、その授業での取組の視点が、各部会の研究課題に沿ったもので、単元計画、授業計画で多くの工夫が見られた。学習に対する意識が高揚し、学習に対するの変化が見られるようになった。

	平成14年9月	平成15年12月
授業中熱心に聞く	27.1%	50.5%
忘れ物をしない	38.7%	55.6%
ノートをきちんと取り整理する	53.8%	62.4%
大事な所にアンダーラインを引く	41.2%	63.1%

(学習に関する意識調査より)

朝読書活動と図書館の整備の充実と図書委員の活動により、生徒の読書量、図書館の利用が飛躍的に増加している。

図書の貸出状況

平成12年度 350冊 平成13年度 1278冊 平成14年度 1922冊
平成15年度 2512冊(12月末現在)(図書貸出統計より)

2. 今後の課題

生徒の学力格差が見られ、まだまだ基礎・基本的な内容が十分に生徒に理解させていない現状がある。そのため個に応じた教材のより一層の工夫改善が求められる。また、学習の定着のために定期考査のみならず、単元末の確認テストをおこないこまめに生徒の学力を評価し、その指導にあたる必要がある。また学習機会の充実のためにも家庭学習の定着を進め、課題の提出やその確認を通して、補充指導が必要な生徒に対しては適宜おこなう必要がある。

学習に対して積極的に問題を解決しようとする姿勢に欠けている面が学習に関する意識調査の中からもうかがえる。学習形態や発展性のある教材の活用が必要である。

	平成14年9月	平成15年12月
分からないことを本や辞書で調べる	10.1%	21.1%
多くの発表をする	8.5%	14.0%
班活動を積極的におこなう	4.0%	11.1%
分からないところを質問する	12.6%	20.8%

学力把握のための学校としての取組

学習に関する意識調査の実施

調査の目的：生徒の学習に対する意識の把握と変容を教科指導に生かす。

実施内容：各教科の自己達成度・家庭学習について・授業に対する取組

侍史時期：各学期末

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究会、説明会等の開催

学力向上フロンティアスクール事業実践交流会

平成16年1月16日(金曜日) 場所：仲津中学校 対象：管内の教職員

目的：フロンティアスクールとしての研究成果の普及および指導力の向上

フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動

指導方法工夫改善に関わる研修会講師(平成16年2月19日)

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上

【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他

【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無